

日・タイ語のテンスとアスペクトの対照 および教授法に関する一考察

ラ ッ チャ ニ ー ・ ピ ャ マ ー ワ デ ィ ー

1. はじめに

本稿は、タイ人の日本語学習者にとって、最も問題になる、文末における動詞のテンスとアスペクト「～ル」、「～タ」、「～シテイル」、「～シテイタ」と、それぞれの意味を表わすタイ語の基本形「V」⁽¹⁾、未来形「cà+V」、完了形「V+léæw」、進行形「kamlaɯ+V」、「V+yùu」、「kamlaɯ+V+yùu」を比較対照する。そこから得た結果を考察し、タイ人を対象としたより効果的な日本語のテンスとアスペクトの教授法を試みる。

2. テンスとアスペクトの概念及び定義

日本語のテンスについては、山田孝雄(1908)、松下大三郎(1928)、金田一春彦(1957)、鈴木重幸(1972)、寺村秀夫(1973)、草薙裕(1975)などの様々な見解がある。つまり、時間の表現、アスペクト、単なるムード、又はアスペクトあるいはムードと関連して見る見解がある。が、何れの説もテンスが動詞の変化で表わされるものであるという点では一致している。

一方、アスペクトについては、松下(1914)、佐久間鼎(1936)、鈴木(1972)の何れの見方も、アスペクトが動作・作用のいろいろなあり様であり、動詞自体の性質と大きな関係をもっているとしている。

ここでは、前述の見解もふまえながら、言語一般のテンスとアスペクトの表現法を通して次のように定義する。

「テンス」は、時の流れのうちの一点を基準として、その時点、それ以前、それ以後の動作・作用や状態のなりたつ時間を一定の形態(助動詞、活用語尾)によって表現し分ける文法的なカテゴリーである。

「アスペクト」は、述語の形態や補助形式によって表現される動作・作用のいろいろなあり様である。

3. 日本語におけるテンスとアスペクト

動詞の性質と密接な関係があるテンスとアスペクトの形と意味を考察する際、動詞の分類が必要となる。本研究の最終の目的が前述のとおり、タイ人に対する日本語教授法への試みにあることから、タイ人が理解しやすく、又、タイ語分析でも類似の分析がある、金田一(1950)の動詞の四分類(状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第四種の動詞)を中心

に、分析、記述を進めていく。

I テンズ

日本語動詞のテンズは、基本形「～ル」と過去形「～タ」の形態的な対立がある⁽²⁾。状態動詞の場合、「～ル」は現在・未来を表わし、「～タ」は過去を表わす。「～ル」は動作・作用動詞の場合、未来を表わす。又、「～ル」は現在の習慣、意志、「～タ」は完了、期待の実現を表わすこともできる。「～ル」と「～タ」は次のような意味を表わす。

A 「～ル」型

- 1) 現在の状態・存在
 1. 「うん、コダがね、病院にいるのよ」(友, 225)⁽³⁾
- 2) 現在の習慣
 2. 「ぼくも時々、この図書館に来るんです」(砂, 19)
- 3) 未来の状態・存在
 3. お母さんは明日家にいる。
- 4) 未来の動作・作用
 4. 「……そんなきかない口をきくと、また、ねえちゃんに叱られるよ」(青, 21)
- 5) 話し手(疑問文の場合、聞き手)の意志
 5. 「モリ、文化祭まで、私毎日来るわ」(友, 153)

B 「～タ」型⁽⁴⁾

- 1) 過去の状態・存在
 6. 「色々な用事があったの」(青, 14)
- 2) 過去の動作・作用
 7. 「うん、さっきおつりあげるの忘れたんだ」(青春, 24)
- 3) 過去の習慣
 8. 武も、えつ子も、ひまのあるかぎり、田畑に出て働いた。(夜, 190)
- 4) 完了⁽⁵⁾
 9. 「はらがへった。何かうまいものでもくいたいな」(夜, 170)
- 5) 期待の実現
 10. 「わいた、わいた、おゆがわいた。」
- 6) 思いおこし
 11. 「あ、だめだ、アルバイトがあったの」

II アスペクト

状態動詞には「～シテイル」の形がなく、「～ル」で現在・未来を表わす。一方、動作・作用を表わす動詞では「～ル」は未来、「～シテイル」は現在および未来を表わす。

A 「～シテイル」型

- 1) 動作・作用の進行継続
 12. 「え、無論、愛している。……」(波, 57)
 13. 「何を見ているんです」(三, 87)
- 2) 動作・作用の結果が現在にあること

14. 「先輩、この人を知っていますか？」(青, 66)

3) 現在の単なる状態

15. 塔が空高くそびえている。

4) 現在の動作・作用のくり返し

16. 「母さんの写真の毎朝、手を合わせてるわ」(砂, 11)

5) 経 験

17. 「木曜日、私、会ってるわ、片桐さんと」(友, 20)

B 「～シテイタ」型

1) 過去の動作・作用の進行継続

18. 私が部屋に入った時、彼は本を読んでいた。

2) 動作・作用の結果が過去にあったこと

19. 油がきれていた。

3) 過去の動作・作用のくり返し

20. 母さんはその頃、英語と英語タイプを毎日、習いに行っていました。(砂, 34)

4) 過去の単なる状態

21. …主人公の兔の顔が母さんによく似ていたからなの。(砂, 16)

4. タイ語におけるテンスとアスペクト

タイ語のテンスとアスペクトの考察には、カーンチャナワン (1978) の動詞の分類を用いる。状態動詞と動作・作用動詞の基本形「V」は現在を表わすが、結果動詞の「V」は過去を表わす。

I テンス

タイ語は動詞の変化がなく、それによってテンスを表わせないため、テンスのない言語だとよく言われている⁶⁾。しかし、タイ語でも時の副詞や助動詞が動詞の前後に置かれてテンスが表現される。現在と過去は助動詞が見つからないが、未来は助動詞「cà」が不可欠であり⁷⁾、従って、次の例のように現在と過去は「V」で、未来は「cà+V」で表わされる。

1. khǎw àan nǎgsiiphim

彼 読む 新聞

= {彼は新聞を読む。(現在, 習慣のみ)
{彼は新聞を読んだ。

2. khǎw pay roogriiaan miiáawaannii

彼 行く 学校 きのう

= 彼はきのう学校へ行った。

3. chǎn cà pay roogriiaan

私 助動 行く 学校

= 私は学校へ行く。

II アスペクト

タイ語では、助動詞が動詞の前後に置かれることによって、アスペクトが表わされる。

「lǎəw」は完了, 「kamləŋ」, 「yùu」, 「kamləŋ—yùu」は進行継続を表わす助動詞である。

A 「lǎəw」は、動作・作用動詞の場合、動作・作用が完了したこと(例文(4))。状態動詞の場合、ある状態が新しい状態に変化したこと(5)、更に結果動詞の場合、動作・作用が完了したこと、あるいは、その完了の結果を表わす(6)。

4. dək kin khâw lǎəw
子供 食べる ごはん 助動
= 子供がごはんを食べた。
5. tha klùmcaj lǎəw
彼女 心配する 助動
= 彼女は心配するようになった。
6. khǎw taay lǎəw
彼 死ぬ 助動
= 彼は死んだ。

B 「kamləŋ」, 「yùu」, 「kamləŋ—yùu」は、何れも進行継続を表わす。

7. khǎw $\left\{ \begin{array}{l} \underline{\underline{kamləŋ}} \\ \underline{\underline{kamləŋ}} \end{array} \right\}$ aàn nǎŋsǐi $\left\{ \begin{array}{l} \underline{\underline{yùu}} \\ \underline{\underline{yùu}} \end{array} \right\}$
彼 助動 読む 本 助動
= 彼は本を読んでいる。
8. fay kamləŋ dǎp
電気 助動 消える
= 電気が消えている。
9. fay dǎp yùu
電気 消える 助動
= 電気が消えている。

原則として、進行継続の助動詞は結果動詞につかないが、(8)のようにたくさんの電気がどんどん消えている、(9)のように状態を表わす例外の用法がある。

5. 日本語とタイ語におけるテンスとアスペクトの比較対照

I 日本語の「～ル」と対応するもの

日本語の「～ル」形は未来、および状態動詞の場合現在も表わす。それに対応するタイ語の形は、現在が「V」形、未来が「cà+V」形であるから、次のような対応関係がある。

A 「～ル」↔「V」

1) 現在の状態・存在

1. 「うん、コダがね、病院にいるよ」(友, 225)
= “ʔo koda rí yùu thii rooŋphayaabaan nǎəw”
2. 「…あなた方、ドイツ語は出きますか」(友, 106)
= “…phuuâak khun phùut phaasǎa yeeraman dǎay máy khráp”

2) 現在の習慣

3. 「ほくも時々、この図書館に来るんです」(砂, 19)

= “baaŋthii phǒm kǎo maa thii hǎoŋsamùt níi miiaankan”

B 「～ル」 ↔ 「cà+V」

1) 未来の状態・存在

4. お母さんは明日家にいる。

= phrúŋnii khun mǎæ cà yùu bǎan

2) 未来の動作・作用

5. 「…そんなきかない口をきくと、また、ねえちゃんに叱られるよ。」(青, 21)

= “…thǎa phii dǎay yin khamphúut yàapkhaay yàaŋnán kǎo cà thùuk èt aw ná”

3) 話し手(疑問文の場合、聞き手)の意志

6. 「モリ、文化祭まで、私、毎日来るわ」(友, 153)

= “mori chǎn cà maa thúk wan conkwàa cà thǐŋ wan ŋaan”

II 日本語の「～タ」と対応するもの

日本語の「～タ」形は過去、動作・作用の動詞の場合、過去・完了を表わす。「～タ」は、又思いおこし、期待の実現も表わす。それに対応するタイ語の形は、過去と思いおこしが「V」形、完了及び期待の実現が「V+lǎæw」形であるから、次のような関係がある。

A 「～タ」 ↔ 「V」

1) 過去の状態・存在

7. 「色々な用事があったの」(青, 14)

= “mii thúra láayyǎaŋ ná”

2) 過去の動作・作用

8. 「うん、さっきおつりあげるの忘れたんだ」(青春, 24)

= “miiáakii hím háy taŋtǎoŋ”

3) 過去の習慣

9. 武も、えつ子も、ひまのあるかぎり、田畑に出て働いた。(夜, 90)

= thǎŋ takeshi lǎe etsuko tàaŋ pay thamŋaan nay thǔŋnaa thúkkráŋ thii mii weelaa wǎaŋ

4) 思いおこし

10. 「また外国語が出ました。ノウは英語にもありましたね。」(青春, 154)

= “mii phaasǎa tàaŋ prǎthéet iik lǎæw nay phaasǎa aŋkrit kǎo mii kham waá noo duuêe ná”

11. 「あ、だめだ、アルバイトがあったの」

= “úy mǎy dǎay lá mii ŋaanphisèet ná”

思いおこしの場合には、「～タ」が用いられる。一方、タイ語では、「V」で表現するが、

過去のことでなく、むしろ、現在のことをいっているのである。つまり、(10)の「ノウ」は過去から現在にいたるまでその状態にあることから、現在のことだと解釈される。従って、「mii」は現在の状態を表わすことになる。

又、(11)の「mii」を「アルバイトがあることになっている」ということは、過去の時点に決まったが、今なおその「mii」の状態にあるので、現在を表わすといえる。

B 「～タ」↔「V+léæw」

1) 完了

12. 「あ、はらがへった。何かうまいものでもくいたいな」(夜, 170)

= “ooy hīw léæw yàak kin ʔray ʔròy ʔròy sàk nõy”

2) 期待の実現

13. 「わいた、わいた。おゆがわいた」

= “diiàat léæw, diiàat léæw náam diiàat léæw”

III 日本語の「～シテイル」と対応するもの

日本語の「～シテイル」形は継続動詞の場合、進行継続を表わし、瞬間動詞の場合、動作・作用の結果を表わす。そして、第四種の動詞では、必ず「～シテイル」で用い、単なる状態を表わす。タイ語では、進行継続を表わす「～シテイル」と対応する形は「kamlay +V」, 「V+yùu」, 「kamlay+V+yùu」である。が、単に「V」で進行継続を表わすこともある。前述の他の意を表わすタイ語の対応形は「V」であるが、「V+léæw」で動作・作用の結果を表わす場合もある。又、「～シテイル」が作用の進行継続と作用の結果を表わすのに、タイ語では、「kamlay+V」と「V+yùu」が用いられる。それぞれの対応関係は次のようである。

A 「～シテイル」↔「V」

1) 動作・作用の進行継続

14. 「え、無論、愛しています。」(波, 54)

= “chây, nææ lá rák

「rák」は精神や感覚を表わす状態動詞なので、「V」のみでその状態が表わされる。

2) 動作・作用の結果が現在にあること

15. 「油は切れてるんです」(友, 63)

= “phró náamman mot ná”

16. 「先輩は、この人を知ってますかの」(青, 66)

= “phii rúucàk khon nii máy khráp”

(15)の「mòt」は結果動詞であり、動詞それ自体が過去の動作または作用を表わす。日本語とタイ語の相違は、動作・作用、又は、結果のどちらに重点が置かれるかということである。日本語では、瞬間動詞の場合「～シテイル」は現在における動作・作用の結果に重点が置かれているが、タイ語の結果動詞は、動作・作用が起こったあとにその結果が残っている為、動作・作用が起こったことに重点が置かれるとはいえ、その状態がまだ残っていることも同時に表現される。又、(16)の「rúucàk」は状態動詞であり、それ自体で状態が表わされる。従って、このような場合、「～シテイル」と「V」が対応する。

3) 現在の単なる状態

17. 塔が空高くそびえている。

= hǒ sǔuŋ trǎŋàan yùu nay thóuŋ fáa

「～シテイル」は第四種の動詞について状態を帯びることを表わす。一方、「sǔuŋ trǎŋàan」は状態動詞であり、「V」のみで用いられる。

4) 現在の動作・作用のくり返し

18. 「母さんの写真？ 毎朝、手を合わせてるわ」(砂, 11)

= “rúup khun mâæ nâ rii kràpwâay thúk cháw ná kâ”

(18)の「～シテイル」は動作が一つの進行過程としてくり返し行われることを表わす。一方、タイ語では「V」が用いられ、副詞や文脈からくり返しの意味が分かる。

5) 経験

19. 「木曜日、私、会ってるわ、片桐さんと」(友, 20)

= “chǎn ca khun katagiri míiáa wanphrátihàt nâ kâ”

「～シテイル」は、過去に起こった動作・作用の間接的結果を経験として表わす。タイ語では、単に動作・作用の起こった時点にのみ重点が置かれ、文脈で経験の意がとられる。

B 「～シテイル」↔「V+léæw」

動作・作用の結果の状態

20. 「今日、私にも、彼が来るよ。婚約しているの」(青春, 17)

= “wannii khǎw cà maa hǎa chǎn duuêe chǎn mân léæw ná”

21. 貧乏なら慣れている。(青春, 39)

= “thâa khwaam con lâ kǒo chin léæw

(20)の「mân」は結果動詞であり、「léæw」を伴い、完了の結果を表わす。(21)の「chin」は状態動詞であり、「léæw」がつくと、その新しい状態に変化したことを表わす。従って、動作・作用の結果を表わす際、「～シテイル」と「V+léæw」が対応する。

C 「～シテイル」↔ $\begin{cases} \text{「kamləŋ+V」} \\ \text{「V+yùu」} \\ \text{「kamləŋ+V+yùu」} \end{cases}$

現在の動作・作用の進行継続

21. 「何を見ているんです」(三, 87)

= $\left. \begin{matrix} \text{「kamləŋ」} \\ \text{「kamləŋ」} \end{matrix} \right\} \text{duu } ?\text{ray } \left. \begin{matrix} \text{「yùu」} \\ \text{「yùu」} \end{matrix} \right\} \text{nâ}$

D 「～シテイル」↔「kamləŋ+V」

作用の進行継続

22. たくさんの電気がどんどん消えている。

= fay camnuuaan mâak kamləŋ dâp yàaŋ ruuâat rew

「～シテイル」は、瞬間動詞について、動作・作用の起こったあとの結果を表わすが、

(22) のような場合には、「～シテイル」は進行継続を表わす。タイ語では、【「kamləŋ」は結果動詞につかないが、(22) のような場合には、「kamləŋ+V」が用いられる。

E 「～シテイル」↔「V+yùu」

(23) の例では作用の結果が現在にあることを表わしている。

23. 電気が消えている。

= fay dáp yùu

IV 日本語の「～シテイタ」と対応するもの

「～シテイタ」は「～シテイル」の「～タ」形であり、これとタイ語の表現との対応は過去に関することであるという以外原則的に上記の「～シテイル」とタイ語の表現の対応に一致する。ただし、タイ語では前述のように、「V」形が現在と同様に過去も表わすことを指摘しておく。

以上の対応関係を次の表にまとめておく（次頁）。

6. 日本語のテンスとアスペクトに関する難易点考察及び教授法

I 難易点考察

1. 未来の状態・存在，動作・作用，話し手（疑問文の場合，聞き手）の意志を表わす「～ル」↔「cà+V」

日本語の状態動詞の基本形「～ル」は現在・未来を表わし，継続動詞及び瞬間動詞の「～ル」は未来を表わす。一方，タイ語の「cà」は何れの種類の動詞の前に置かれても未来を表わす。両言語の未来を表わすテンスの形が違う為，タイ人はテンスを混用しがちである。つまり，タイ人は文脈や時の副詞がなければ「～ル」は現在，未来のどちらを表わすか分からないが，「～ル」と「V」の両方が現在の意味を表わすので「～ル」を現在だと解釈してしまうことが多いようである。

又，意志を表わす場合，日本語は基本形「～ル」で，タイ語は未来形「cà+V」で表わすため，これも問題となってくるのである。

2. 過去の状態・存在，動作・作用，習慣を表わす「～タ」↔「V」

日本語の「～ル」は現在と未来を表わすが，タイ語の「V」は現在と過去を表わすので副詞がなければ，「～タ」形と「～ル」形の混同をする。

3. 完了を表わす「～タ」↔「V+ləəw」

「V+ləəw」は完了を表わす。一方，日本語の動作・作用を表わす動詞の「～タ」は過去と完了を表わし，文脈によって完了の意味が区別される。「～タ」はタイ語の「V」と「V+ləəw」となる場合にわかれるため，タイ人にとって，問題になりやすいのである。

4. 期待の実現を表わす「～タ」↔「V+ləəw」

この際，日本語では，「～タ」，タイ語では「V+ləəw」が用いられる。が，これは前項と同じ問題なので，タイ人にとって理解しにくい点である。

5. 思いおこしを表わす「～タ」↔「V」

この場合には，日本語は，その状態や動作・作用が認識された時点に重点が置かれるが，タイ語では，発話時点を基準にして，その状態，動作・作用がすでに起こったか，又

日本語とタイ語のテンスとアスペクトの対応表

状 継 瞬 第四			意 味			状 動 結		
ル	ル	ル	現在	状態・存在		V	V	V
				習 慣				
ル	ル	ル	未来	状態・存在		C+V	C+V	C+V
				動作・作用				
タ	タ	タ	過去	状態・存在		V	V	V
				習 慣				
				動作・作用				
タ	タ	タ	話し手(疑問文の場合, 聞き手)の意志			V+L	V+L	V+L
			思 い お こ し					
シテイル	シテイル	シテイル	現在	動作・作用	進行継続	V K+V V+Y K+V+Y	K+V V+Y K+V+Y	K+V
					結 果			
シテイル	シテイル	シテイル	現在の動作・作用のくり返し			V	V	V
			経 験					
シテイタ	シテイタ	シテイタ	現在の単なる状態			V K+V V+Y K+V+Y	K+V V+Y K+V+Y	K+V
			過去	動作・作用	進行継続			
過去の動作・作用のくり返し					V	V	V	
過去の単なる状態			V	V				V

註 V は 動詞の原形 K は kamləŋ C は cà Y は yù L は læəw

は、現在のことなのであるか、あるいは、未来のことなのかに重点が置かれる。従って、現在や未来についての思いおこしなら、タイ語では、それぞれ単に「V」又は「cà+V」で表現する。ただし、「mii」（ある）は、「cà」が省略されることが非常に多い。このような場合の日本語の「～タ」の用法はタイ人にとって適切に使うことがむずかしい。

6. 動作・作用の進行継続を表わす「～シテイル」、「～シテイタ」↔「V」

進行継続を表わす「～シテイル」、「～シテイタ」とタイ語の「kamlaɯ+V」、「V+yùu」、「kamlaɯ+V+yùu」が対応するが、タイ語は、状態動詞の場合には「V」のみで表わすこともある。これは動詞の種類と関係をもっていると考えられる。つまり、日本語において、動作・作用を表わす動詞の「～ル」は現在の状態を表わさないため、「～シテイル」が用いられるが、タイ語の状態動詞の「V」は現在の状態を表わすので、「～シテイル」との進行継続の対応形を使う必要がない。又タイ語の状態動詞に進行形がつけば、単に現在の状態を表わすのではなく、むしろ、最盛、最高のニュアンスも含まれているので、多少日本語の「～シテイル」の意味と違ってくる。

7. 動作・作用の結果を表わす「～シテイル」、「～シテイタ」↔「V+lǎæw」

瞬間動詞の「～シテイル」は、動作・作用の結果を表わす。一方、「V+lǎæw」は完了と、動詞の種類によっては、ある状態に変化したこと、又は、結果の状態を表わす。従って場面や文脈がなければ、どちらの意味を表わすか明確に判断できないため、無意識に完了に解釈してしまうことが多い。又、結果の状態を表わす「～シテイル」との対応形がないので、タイ人にとって困難を覚える。

又、「V」で動作・作用の結果と表わすことがある。これは状態動詞と結果動詞に見られる。タイ語の結果動詞はそれ自体過去を表わすが、一度起こったら、その結果が残るため「V」で結果の状態が表わされるわけである。状態動詞の場合にも「V」でその状態が表わされる。一方、日本語では、過去の場合「～タ」、結果の場合「～シテイル」が用いられる。この用法はタイ人にとって理解しにくい。

8. 経験を表わす「～シテイル」↔「V」

日本語は「～シテイル」で、タイ語は「V」で表わす。経験の意は文脈から判断される。

9. 動作・作用のくり返しを表わす「～シテイル」、「～シテイタ」↔「V」

タイ語は単に「V」のみで表現し、くり返しの意味は副詞から分かる。

10. 単なる状態を表わす「～シテイル」、「～シテイタ」↔「V」

第Ⅳ種の動詞は「～シテイル」をもって単なる状態を表わすが、タイ語の状態動詞は「V」のみで表わす。

11. 作用の結果の状態を表わす「～シテイル」、「～シテイタ」↔「V+yùu」

ある状態が継続していることを表わす場合、「yùu」が例外の用法として結果動詞につく。しかし、この「V+yùu」は作用の完了の結果を表わすのではなく、むしろ、眼前の状態が継続していることを表わすのである。従って、形の上では「～シテイル」と同様に見えるが、ニュアンスが多少違うため、タイ人にとって注意が必要である。

II 教授法

日本語とタイ語の動詞の基本形が違う意味を表わすこと、又、その動詞の性質が非常に

異なる場合があるため、両言語のそれぞれの意味を表わすテンスとアスペクトの用法に相異の出ることが分かる。従って、タイ人にとって、起こりそうな問題を解決するため、次のような用法が効果的であろう。

時の副詞や文脈がなければ、タイ語の動詞の「V」は現在、過去、日本語の動詞の「～ル」は現在・未来のどちらを表わすか判断できないことから、教える際、必ず副詞を用いながら、テンスを教える。これによって、学習者は、日本語の「～ル」とタイ語の「V」の用法がよく理解できるようになり、テンスを正しく使用することができる。

更に、以上あげたもの以外のテンスとアスペクトに関する問題点は、すべて動詞の種類によるものであるため、動詞の種類やそれぞれの動詞の「～ル」、「～タ」、「～シテイル」、「～シテイタ」の用法を各々個別に覚させる必要がある。

以上述べたことをよく理解すれば、タイ人の学習者は、日本語のテンスとアスペクトの複雑な問題について解決できるようになると思われる。

- (1) タイ語の動詞は活用形変化がないため、基本形「V」はどのテンスとアスペクトにも用いられる。
- (2) 「～ル」と「～タ」の対立はテンス、アスペクト、ムードのいろいろな角度から考えことも可能で、従来いろいろな意見が出されているが、本稿では、この対立を本質的には「時」に関わるものと考え、テンスの問題として扱う。
- (3) 例文の後の（ ）の中は作品名及び、そのページを示している。原典については、本稿の最後にリストをのせてある。（ ）のない例文は筆者が作ったものである。
- (4) 「外に出た、出た」のようなぞんざいな命令は相手を自分の命令することに誘い込むため、その動作をすでに実現したことのようにいっている。しかし、この他にも「出て、出て」とか「出る、出る」などがあり、動詞を二つならべることでも命令を表わしているようである。従って、「出た、出た」の「～タ」形は直接テンスは問われないと考えられるので、ここでは問題としない。又、「よし、あげた」というような表現は、実際にはまだ実現していない動作を確実に実現すると考え、先回りして実現したと宣言・承認する。この用法は非常に限られているので、ここではこれ以上触れない。
- (5) 「～タ」は形の上では過去であるか、完了であるか区別できないが、文脈や場面によって判断される。つまり、過去というものはその動作・作用がすでに起こって現在と切りはなされるが、完了は、その動作・作用がすでに起こったが、まだ現在とつながってきりはなせないのである。従って、「～タ」が過去と完了のどちらも表わすため、その動作・作用が現在とつながっているかどうかは文脈や場面によって判断される。
- (6) 例えば、シンタワナンタ (1970)
- (7) 未来を表わす文にも「cà」がないものがある。ただし、この文が未来を表わすことは、この文の文脈(副詞)から明らかでなければならない。従って、根本的には未来の文に「cà」が必要だと考える。
- (8) 「kamlaj」, 「yùu」, 「kamlaj—yùu」は、意味上では、何れも進行継続を表わすが、構造としては、「kamlaj」は、動詞の前、「yùu」は動詞の後につく、「kamlaj」と「yùu」は一緒に用いられ、「kamlaj+V+yùu」になる。

タイ語の字訳表註

子音

			両唇音	唇歯音	歯蓋音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破	裂	音			t		k	ʔ
		無声・無気	p		th		kh	
		無声・有気	ph		d			
破	擦	音	b					
		無声・無気				c		
		無声・有気				ch		
摩擦	音	無		f	s			h
		無	m		n		ɟ	
		擦			l			
側	面	音			r			
		る						
		え						
半	母	音	w			y		
		母						

母音

	前舌		中舌		奥舌	
	短	長	短	長	短	長
高	i	ii	ɨ	ɨi	u	uu
中	e	ee	ə	əə	o	oo
低	æ	ææ	a	aa	ɔ	ɔɔ
二重母音	ia		ia		ua	

音調

	記号	例
高	´	/kháa/ 高売
中	なし	/khaa/ ひっかかる
低	`	/khàa/ スパイス
昇	∨	/khǎa/ 足
降	へ	/khâa/ 殺す

註 タイ語字訳表についてはカーンチャナワン (1978) から引用する

参 考 文 献

- 金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」(『言語研究』15) 金田一編 (1976) に再録。
——(1955)「日本語のテンスとアスペクト」(『名古屋大学文学部研究論集』) 金田一編 (1976) に再録。
——(1957)「時・態・相・および法」(『日本語文法講座』1, 明治書院)。
——編 (1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房。
草庵裕 (1975)「言語活動における認知作用——意味論における一仮説——」(『言語の科学』第6号, 85—112 ページ所収)。
松下大三郎 (1914)『標準日本文法』紀元社。
——(1928)『改選標準日本文法』中文社。
三上章 (1953)『現代語法序説』くろしお出版, 1972, 復刻版。
佐久間鼎 (1936)『現代日本語の表現と語法』恒星社厚生閣, 1951, 改訂版,
鈴木重幸 (1957)「日本語の動詞のすがた (アスペクト) について——～スルの形と～シテイルの形」(言語学研究会報告) 金田一編 (1976) に再録。
——(1958)「日本語動詞のとき (テンス) とすがた (アスペクト)——～シタと～シテイタ」(言語学研究会報告) 金田一編 (1976) に再録。
——(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房, 1978。
寺村秀夫 (1973)「テンス・アスペクト・ヴォイス」(『国語シリーズ』別巻2, 文化庁)。
山田孝雄 (1908)「文法上の時の論」(『日本文法論』寶文館, 1937, 復刻版)。
Kanehanawan, N. 1978, Expression for Time in the Thai Verb and its Application to Thai-English Machine Translation, The University of Texas at Austin. Ph. D. dissertation.
Sindhawananda, K. 1970, The Verb in Modern Thai, Georgetown University. Ph. D. dissertation.
Sinlapasarn, U. 1956, Sayaam wayyaakorn waciiwiphaak Bangkok : Thaiwathanaaphanich.
Suphanvanich, I. 1973, Kaan nay phaasaa Thai, Master's Thesis, Chulalongkorn University.

参 考 資 料

- 遠藤周作『砂の城』新潮文庫, 1980。
石坂洋次郎『青い山脈』新潮文庫, 1978。
森村桂『青春がくる』角川文庫, 1979。
——『友だちならば』角川文庫, 1979。
夏目瀬石『三四郎』角川文庫, 1980。
住井すゑ『夜あけ朝あけ』新潮文庫, 1979。
山本有三『波』新潮文庫, 1980。

(筑波大学大学院修士課程地域研究修了,
タイ・チュラロンコン大学専任講師)